

屋久島におけるエコツアーガイドの実態と課題

松本富美子・田代正一・大西 絹

(農業経済学研究室)

平成15年8月10日 受理

要 約

今日、地球レベルで環境問題が深刻化してきている。1972年には国連人間環境会議において「持続的開発」の基本理念が取り上げられ、それとともに「エコツーリズム」の概念も広まってきた。エコツーリズムの定義は多様であるが、一般に「観光産業の発展」、「自然・文化・歴史の保護」、「地域の活性化」が合わさったものをエコツーリズムと呼んでいる。屋久島は世界自然遺産に登録されて10年余りが経過し、エコツアーのメッカとして知られる島である。エコツアーにはエコツアーガイドの存在が不可欠である。屋久島にはおよそ80人のエコツアーガイドがいると言われるが、その正確な人数は把握できていないのが現状である。本稿では、屋久島を事例として、エコツアーガイドの意識を分析するとともにエコツアーガイドが抱える課題についても考察する。

キーワード：屋久島、エコツアーガイド、資格・認定制度、自然保護、地域活性化

はじめに

「エコツーリズム」、「エコツアー」という言葉が脚光を浴び始めている。近年、自然環境の破壊、環境汚染の問題が頻繁にクローズアップされる中でエコツーリズムへの関心も拡大してきている。2002年は国連が定めた「国際エコツーリズム年」ということもあり国際的にエコツーリズムが注目されている。

このように近年急速に広まってきたエコツアーに欠かせないのがエコツアーガイドの存在である。旅行者がエコツアーを十分に満喫できるかどうかはエコツアーガイド次第である。旅行者を満足させるために、エコツアーガイドにはその地域の自然や文化についての専門的な知識が要求される。

エコツアーにおいて不可欠な存在であるエコツアーガイドがどのような意識を持っているかを明らかにすることは、エコツーリズムの発展にとって重要なことである。エコツアーガイド自身が納得のいくものでなければ、よいエコツアーにはならないと考えるからである。また、かなりハードな仕事をしているエコツアーガイドの意識を分析することは非常に興味深いことである。とくに屋久島ではここ10年程の間に様々な変化が起こっている。本稿では、屋久

島におけるエコツアーガイドの実態とエコツアーの現状を分析し、さらに今後の課題についても検討してみたい。

屋久島は鹿児島県本土最南端の佐多岬から南に約60kmに位置する面積約500km²、周囲約132kmの島である。この島は九州最高峰の宮之浦岳をはじめとして標高1,000m以上の山々が連なり「洋上アルプス」とも形容されている。林美美子の小説『浮雲』の中で「一月に三十五日雨が降る」と表現されているように、山岳地帯には年間8,000mm～10,000mmの雨が降る。その湿潤な気候は杉が生育するのに適している。湿潤な気候と標高差により縄文杉をはじめとする樹齢1,000年以上の巨大杉群や亜熱帯植生から温帯、亜高山帯の植生の垂直分布が見られるなど世界的にも貴重な自然がある。

屋久島の自然環境は世界に一つしかないと認められ、1993年12月、日本で最初の「世界自然遺産」に登録された。それ以来屋久島を訪れる旅行者は大きく増加した。さらにアメリカで起こった9.11同時多発テロを契機として、海外への旅行者が減少するなかで屋久島への旅行者が増加しており、エコツアーを体験する観光客の数も増えてきている。

このような独特な環境を持つ屋久島において、ど

のような人たちが、どのような目的や考えを持ち、どのような理由でエコツアーガイドとして活動しているかを考察してみたい。さらに、コッツアーガイドが抱えている不満や要望なども分析し、屋久島におけるエコツーリズムにどのような課題があるのかを明らかにしたい。

エコツーリズムの歴史と概念

「エコツーリズム」という言葉が誕生し急速に広まっていった背景には、地球レベルでの環境問題の深刻化と持続可能な開発を目指す世界的な動きがある。その始まりとなったのが1972年の国連人間環境会議（ストックホルム会議）である。1980年には国際自然保護連合(IUCN)、世界自然保護基金(WWF)、国連環境会議(UNEP)によって「世界保全戦略」が発表され、この中で「持続的開発」という理念が初めて提唱された。

また、1972年に世界遺産条約の批准に関して議論が始まったこともエコツーリズムの発展に関与している。同条約により「地球人にとって大事なものを残していくために世界遺産という形で指定し管理していく」ことが決まった。この「持続的開発」と「世界遺産条約」に世界中の国々が賛同していった。

エコツーリズムが世界的に拡大していった背景には、それが観光分野における「持続可能な開発」(sustainable development)の基本理念として、いくつかの国際機関で取り上げられたことがある。1982年にはIUCNが「第3回世界国立公園・保護地域会議」の議題としてエコツーリズムを採り上げ、WTO（世界観光機関）とUNEPは「観光と環境に関する共同宣言」に署名した。このようにエコツーリズムは自然保護と観光の共同プロジェクトや環境配慮のためのガイドライン作りという形で広まっていった。

観光は本来「地域のすぐれた資源を体験させ見せる産業」である。エコツーリズムのような環境を保全しながら経済効果をもたらす、その収益を環境保全のために利用するツーリズムこそが今後の観光業の向かうべき方向であるとして急速に普及していった。

日本でエコツーリズムへの取り組みが盛んになったのは1980年代末頃のことである。そして、ここ10年くらいの間に急激に自然保護、環境教育、観光業界などの多様な分野でエコツーリズムへの取り組み

が始まっている。各地でエコツーリズムのための協会が設立され、地域振興への貢献が期待される動きもある。

エコツーリズムの定義は多様であり、いまだ一般に認知された定義はない。研究者によって様々な意味があり、その数は研究者の数だけ存在するとも言われている。エコツーリズムの概念は、資源の持続性がないと観光は成立せず、地域住民の参画がないと資源は守れず、経済効果がないと住民の参画は望めない、という三つの認識の上に成り立っている。つまり地域の文化や歴史、自然とのふれあいを通じて、観光によって自然環境の保全と地域活動や地域経済の活性化を実現することである。「観光産業の発展」、「自然・文化・歴史の保護」、「地域経済の活性化」がミックスされたものをエコツーリズムと呼んでいる。この三つがほどよくバランスを保っている状態がエコツーリズムの理想である。エコツーリズムの目的は、エコツアーの波及効果によってその地域の暮らしが豊かになり、地域の資源が守られ、観光客に自然や文化とふれあう機会が提供されることである。

とはいえ、エコツーリズムの目的は国や地域の状況によって異なる。絶滅の危機に瀕する野生動植物の保護に取り組まなければならない地域では自然保護が第一であるし、経済効果が第一の地域もある。以上のことを踏まえた上で、屋久島におけるエコツーリズムの現状と課題について分析してみたい。

屋久島におけるエコツーリズムの発展

屋久島は1993年12月に東北地方の白神山地とともに日本で最初の「世界自然遺産」に登録された。この登録をきっかけとして観光地としての認識が急速に高まった。屋久島には島の面積の95%を占める約45,000haの森林があり、その中の20%が世界遺産に登録されている。登録基準を満たす要件として次のような点が評価されている。

- ① 日本固有のスギの森林は日本の自然景観の重要な要素であり、高齢樹も見られる屋久島はスギが生育する生態系として最良の地域である。
- ② 各地で急激に減少している照葉樹林が広範囲に原生状態で残されている。
- ③ 亜熱帯地域から亜寒帯地域までの植物が標高差のある屋久島に垂直分布している。

屋久島の森は伐採などの人間による影響を強く受

けながらも、切り株更新などで森林の生態系（人工林ではなく自然林）が受け継がれている。そのことが評価され自然遺産に登録された希なケースである。

世界遺産に登録されるためには各国の国内法によって自然環境が保護されていることが前提であり、屋久島と白神山地が登録される際、日本では国立公園制度、原生自然環境保全地域制度、国有林制度、文化財保護制度等により従来から自然環境の保全が図られていたことが評価された。

多くの場合、世界遺産に登録されることによって観光客が急激に増え、過剰利用になり、自然環境への負担が懸念されるようになる。屋久島では世界遺産登録後に観光客が増加しているとはいっても急激な増加ではない。特定の時期や特定の場所に観光客が集中しているために、利用の分散、利用の仕方、規制対策などが重要になっている。

屋久島では登録後に観光客が増加し、そのほとんどは縄文杉登山を行っている。屋久島警察署によると、登山届け提出人数は1992年の320人から1998年には12,349人に増加している（表1）。登録以前は登山に関する知識がある人が主な登山者であったが、登録後には知識のない観光客まで登山をするようになった。そうした中で屋久島の自然をより深く理解したいという利用者のニーズが高まり、ガイドによる解説を聞くことができるエコツアーが広まってきたと考えられる。

屋久島でエコツーリズムが始まったのはおよそ10年前と言われており、世界自然遺産に登録された頃

のことである。1993年の登録以前には、屋久島ガイド協会（1989年設立）、（有）屋久島野外活動総合センター（YNAC、1993年設立）、ダイビングショップなどのガイド業者があった。その他に個人で山岳ガイド業をやっていた人もいたが、エコツアーという位置づけでのガイドはなされていなかった。屋久島でのエコツアーの先駆けとなったのはYNACであり、屋久島では最初のエコツアー専門会社として設立された。当初は安房川でカヌーのツアーを行っていたが、地元の住民から「飲料水を取る川で遊ぶな」といった非難が起こるなど、認められるのに苦労したという。

その後エコツアー業者や個人ガイドの参入が相継ぎ、様々な料金体系やシステムが混在する状態になった。屋久島で実施されているエコツアーには様々なものがある。例をあげると、登山、森歩き、沢登り、ダイビング、カヤック（リバー・シー）、動植物観察、サイクリング、山菜・昆虫収集、ウミガメ観察、星空観察、タイドプールウォッチング等、各エコツアー会社によっても異なっており、その全体像を把握するのは容易ではない。

料金設定については、縄文杉登山のエコツアーに限ってみると一人平均15,000円くらいである。料金設定の仕方は、何人でツアーを行っても一人当りの料金は同じである場合や、人数が増えるほど割引がある場合など様々である。この設定の仕方にはそれぞれの会社やガイド個人によって異なった考え方やこだわりがあり、どれがよいとは言いきれない。一

表1 屋久島における登山届け提出人数
Reported number of mountain-climbers in Yakushima

（単位：人、％）

| 年／月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 月不明 | 計 |
|-------|------------|------------|---------------|--------------|---------------|------------|---------------|---------------|--------------|--------------|--------------|------------|-----------|-----------------|
| 1992年 | 0 0.0 | 0 0.0 | 1 0.3 | 3 0.9 | 17 5.3 | 4 1.3 | 147 45.9 | 26 8.1 | 9 2.8 | 40 12.5 | 71 22.2 | 2 0.6 | 0 0.0 | 320 100.0 |
| 1993年 | 0 0.0 | 11 1.4 | 380 49.9 | 45 5.9 | 120 15.7 | 75 9.8 | 46 6.0 | 34 4.5 | 16 2.1 | 29 3.8 | 4 0.5 | 2 0.3 | 0 0.0 | 762 100.0 |
| 1994年 | 78 1.1 | 94 1.3 | 700 9.9 | 679 9.6 | 1,189 16.8 | 224 3.2 | 942 13.3 | 1,457 20.5 | 579 8.2 | 525 7.4 | 483 6.8 | 139 2.0 | 4 0.1 | 7,093 100.0 |
| 1995年 | 75 1.0 | 37 0.5 | 954 12.3 | 430 5.5 | 1,501 19.4 | 342 4.4 | 1,202 15.5 | 1,775 22.9 | 387 5.0 | 691 8.9 | 321 4.1 | 37 0.5 | 1 0.0 | 7,751 100.0 |
| 1996年 | 34 0.7 | 32 0.6 | 274 5.3 | 240 4.7 | 932 18.1 | 258 5.0 | 912 17.7 | 1,439 27.9 | 279 5.4 | 403 7.8 | 172 3.3 | 131 2.5 | 51 1.0 | 5,157 100.0 |
| 1997年 | 107 1.0 | 106 0.9 | 916 8.2 | 1,072 9.6 | 1,250 11.2 | 501 4.5 | 1,588 14.2 | 2,346 21.0 | 985 8.8 | 1,060 9.5 | 970 8.7 | 294 2.6 | 0 0.0 | 11,195 100.0 |
| 1998年 | 84 0.7 | 84 0.7 | 1,281 10.4 | 1,184 9.6 | 1,171 9.5 | 481 3.9 | 1,758 14.2 | 2,876 23.3 | 1,227 9.9 | 855 6.9 | 1,011 8.2 | 273 2.2 | 14 1.0 | 12,349 100.0 |

資料：枚田 [3] p.37

人当たりの料金で設定されている場合は、一度に何人ガイドしたとしても一人ひとりに平等なレクチャーや知識の提供をしたいという考えからきているようである。

屋久島におけるエコツアーガイドの実態

1. 調査対象エコツアーガイドの概要

屋久島では様々なエコツアーが実施されている。これらのエコツアーにはそれぞれ専門のエコツアーガイドがいるわけではなく、大抵の場合は一人で様々なエコツアーのガイドを行っている。現在、屋久島にはおよそ80人のガイドがいると言われている。この中には山岳ガイドなど種類の違うガイドも含まれており、全てがエコツアーガイドとは限らない。屋久島ではガイドになるための資格制度や認定制度がないため、ガイドの数を正確に把握することができない。個人として屋久島観光協会に登録しているガイドや屋久島ガイド連絡協議会の会員になっているガイドしか把握できないので、屋久島にどのようなエコツアーガイドがいるかを詳しく分析することは非常に困難である。今回は、屋久島で活動する10名のエコツアーガイドを選び個別に聞き取り調査を行っ

た。調査の対象となったエコツアーガイドの概要を示すと表2のとおりである。

調査対象者の中で女性のエコツアーガイドは1名である。屋久島全体では男性のガイドが多いとはいえ、近年は女性の割合も高くなってきている。10名の調査対象ガイドの中で屋久島出身者は2名だけである。屋久島全体では正確な人数はわからないが、屋久島観光協会の話によると島外出身のガイドの方がかなり多いと予想される。ガイドが屋久島出身であるか島外出身であるかの違いによって、エコツアーリズムに対する考え方に差があるように感じられる。屋久島出身のエコツアーガイドは地域の振興や地元住民との交流に重きを置いた考え方が強いものに対して、島外出身のエコツアーガイドは自然に触れることや自然環境の保全に重きを置いた考え方が強いように思われる。

ガイド歴はエコツアーガイドとしてガイドを始めたときではなく、山岳ガイドなどその他のガイドを始めたときを基準としている。エコツアーが始まる以前からその他のガイド業を行っていた場合、エコツアーガイドとして活動を始めた区切りをはっきりと決めることが難しいからである。

ツアーの頻度はガイドによってかなりの差がある。

表2 調査対象エコツアーガイドの概要
Outline of ecotour guides interviewed

| 性別 | 出身地 | ガイド歴 | ガイド内容 | 頻度 | 料金 |
|------|------------|------|--|--------------------|---|
| A 女性 | 大阪 | 6年半 | ダイビング以外 (メインはウミガメ観察) | 週2~3回 (年間平均) | 一人あたり13000円 |
| B 男性 | 屋久島 | 7年 | 縄文杉登山, 屋久杉ランド, カヌー, 沢登り, 白谷雲水峡 | 週2~3回 年間80~100日 | 一人あたり13500円 |
| C 男性 | 屋久島 | 4年 | 白谷雲水峡, 屋久杉ランド, 島一週案内 | ノーコメント | 2名まで一人あたり14500円 3名以上は徐々に割引 |
| D 男性 | 福岡 | 6年 | 島内ガイド | 年間約200日 夏はほぼ毎日 | 一人あたり23000円, 2名の場合一人14000円, 3名の場合一人12500円と徐々に割引 |
| E 男性 | 静岡 | 25年 | 白谷雲水峡, 屋久杉ランド, CM・映画スタッフ案内 | 3日に一度くらい | 3名まで25000円, 4名以上は1名追加につき3000円 |
| F 男性 | 大阪 | 14年 | 白谷雲水峡, 屋久杉ランド, 縄文杉 | 年間約70日 | 一人あたり一日につき20000円 2名以上は1名追加につき3000円 |
| G 男性 | 兵庫 (大阪) | 8年 | 白谷雲水峡, フォトハイク | 年間約100日 | 一人あたり13500円 |
| H 男性 | 三重 | 4年 | 白谷雲水峡, 屋久杉ランド, カヤック, スキンダイビング, 縄文杉登山 | 1~2回 (夏は多頻度) | 2名まで一人13500円 3名以上は徐々に割引 |
| I 男性 | 福岡 | 14年 | シュノーケリング, 沢登り | 週4~5回 シーズンオフ除く | 一人あたり13000円 4名以上の場合20%割引 家族割引(3名以上)は30%割引 |
| J 男性 | 兵庫 | 15年 | ダイビング, カヤック | 不明 | 一人あたり15000円 |

資料：エコツアーガイドに対する聞き取り調査より作成

これは体力的な問題もあるが、エコツアーガイドを専業で行っているか兼業で行っているかが関係している場合が多い。ガイド E、F および G は兼業のエコツアーガイドである。また、年間平均では頻度が少なくても夏期にはかなりの頻度でガイドをしている場合もある。

2. エコツアーガイドの意識分析

エコツアーガイドはエコツアーを実践する際に重要な役割を果たしている。多くの場合、エコツアーの参加者はガイドを通してエコツアーとは何かを知ることになる。エコツアーガイドはツアー参加者に接しながら自分が持っている知識や考え方、感じ方を伝えていくことになる。その際ガイド個人の主観が入り込んでくるのは当然のことである。エコツアーが充実したものとなり、参加者が満足できるかどうかは、エコツアーガイドの力量次第であると言っても過言ではない。それゆえ、エコツアーガイドがエコツアーについてどのような考えや問題意識を持っているかを分析することは、今後のエコツーリズムの展開を考える上で重要なことである。

(1) エコツアーガイドになった動機

屋久島でエコツアーガイドになった動機として一番多いのは「屋久島の山や森が好き」という点があげられる。屋久島が世界遺産に登録されるような独

特の自然環境をもつ島であることから、その自然への関わりを求めてエコツアーガイドという職業を選択したということである。島外出身のエコツアーガイドが多いのもこのことと関係している。屋久島の自然を求めて屋久島に移り住み、最も自然に関わっている職業がエコツアーガイドだったというパターンである。

しかし、エコツアーはまだ始まって10年足らずの産業である。エコツアーが発展する以前から山岳ガイドなど別の分野のガイド業は存在していた。そうしたガイドとして活動していた人たちが、エコツーリズムの流れに乗っていつの間にかエコツアーガイドという立場になっていたというパターンもあるようだ。

エコツーリズムというものを理解した上でエコツアーガイドになった場合は、自然に関わりたいということが前提としてあるとしても、地域に貢献したいという社会的役割を重要視しているようである。

全体を通して言えることは、この職業を始めるまでに他の何らかの仕事をやっていて、転職という形でエコツアーガイドになったということである。このことは今回の調査対象者に限らず、屋久島のエコツアーガイド全体について言えるようである。

(2) エコツアーガイドという職業に対する意識

多くの場合、エコツアーガイドとして活動し始め

表3 エコツアーガイドの職業認識
Recognition of ecotour guide as an occupation

| | |
|---|---|
| A | この仕事に人生をかけているから一生できるようにやり方を変えて努力していく。 今後、形は変わったとしても自然の中で伝えていきたいことは一生かけても伝えきれないので自分が出会う人に少しでも伝えていきたい。 |
| B | 楽しんでやっているが職業として意識することは大切である。 経済的に苦しくても一生やっていきたい。 体力的に厳しくなったらガイドの指導など他にできることがあるはずである。 |
| C | 生きていけるだけの最低限の収入があるならずっとやっていきたい。 この仕事は遊びのような感覚でできるが仕事という認識は持っている。 |
| D | 外国の山に行きたいのもうすぐ引退するつもりである。 自然が好きでやっているが収入もいい。 |
| E | 長くやる仕事だとは思っていない。楽しくないし、今すぐにでもやめたくて仕方ない。 従業員が生活の糧にしているので続けている。今は他に本気でやりたいことを見つけた。 |
| F | 生活のためではあるが山が好き。他の仕事より適性があると思っている。 エコツアーガイドというよりガイドという認識でやっている。 将来的には兼業でやっている仕事を中心にやっていきたい。 |
| G | 一生の仕事だとは思っていないがこの仕事は好きである。 他に命をかけている仕事がある。 |
| H | あくまで職業だから最低限の生活ができないと続けない。 生活できないほど経済的に苦しくならないようにより方法を考えていく。 |
| I | この仕事を一生やっていきたい。おもしろいし、自分自身成長していつている。 はじめた当初は今では想像もできないくらい貧しかったが、この仕事を切ることはできない。 |

資料：表2に同じ

るまではエコツアーガイドがどういうものであるかの認識はあまりなく、実際に活動し始めてからガイド自身が自分なりの考えに基づいて、エコツアーガイドは何を目指すのか、どのようなものであるべきかを確立しようとしている。そこで、ここではエコツアーガイドという立場からその魅力、重要な事柄、役割等についてガイドがどのように考えているかを分析してみたい。

① エコツアーガイドの職業認識

エコツアーガイドをやっていくに当たって、一生の仕事としてやっているのか、当面の仕事としてやっているのか、また経済的に厳しい仕事だとしても続けていくのか、といった点についてガイドの考え方をまとめたのが表3である。

この職業を選んだ動機として「自然に関わりたい」という考えが多いことから趣味的感覚でやっている場合が多いのではないかと予想されたが、実際は全員が職業であるという認識が基本としてあり、その上に趣味的要素が加わっているようである。エコツアー発展の波に乗ってエコツアーガイドになったという場合は、この職業へのこだわりは小さく、きっかけ次第でやめるという考えのようである。ただ、このようなガイドでも他の職業に比べるとエコツアーガイドの方に適性があると考えており、また経済的に困難でも続けるというガイドが比較的多いことから、ほとんどのガイドがこの職業に強い執着心をもっているようである。

勤務時間や休暇、収入といった職業としての条件についても否定的な考えは少なかった。例えば縄文杉登山について考えると、夏のピーク時期にはほぼ毎日の労働となる場合もある。さらに朝の4時頃から夜の6時、7時というように最低でも14時間労働である。それにもかかわらず楽しいから苦痛ではないという意見があった。

その一方で、体力がないとできない仕事だという意見も多かった。責任を持って安全で充実したガイドをするために、ほとんどのガイドは依頼を断って3日に一度は休みにする方法をとっている。このようにかなりの責任とプロ意識が感じられることから、単なる趣味としてやっているのではなく職業としてしっかりした認識を持って活動していることがわかる。

② エコツアーガイドという職業の魅力

エコツアーガイドのどのようなところに魅力を感じるかについては、大きく2つの側面があるようである(表4)。ひとつは人との関わり合いの部分に魅力を感じており、もう1つは自然との関わり合いの部分に魅力を感じている。エコツアーガイドになった時点では自然との関わり合いの部分に大きな魅力を感じていても、ガイドを続けていく中で人との関わり合いの魅力がだんだんと大きくなっていくようである。

エコツアーガイドEの意見は否定的で例外的な意見である。この意見は自然を保護する上で人が山

表4 エコツアーガイドの魅力
Attractions of being an ecotour guide

| | |
|---|--|
| A | 一生のうちにエコツアーガイドほど多くの人に出会えて、みっちり話せる仕事は他にない。多くの人と親密になれるのが楽しい。 |
| B | 全国各地から来る人から全国各地の情報が聞ける。インターネットのようなハード的なものからではなく人の温かみのような部分から情報を得る事ができる。 |
| C | 多くの人に地球規模での自然保護を伝えていけること。 |
| D | 自然が本当に好きだから自然に関われるということが最高である。ツアー客にたとえ一人だとしても自然のことを伝えることができる。 |
| E | エコツアーガイドという仕事に全く魅力を感じない。むしろ皆やめるべきだと思っている。 |
| F | ツアー客に楽しかったという記憶を残すことができること。 |
| G | 自由業であること。 人に喜んでもらえる上に山を歩けるからこんないい職業はない。 |
| H | 屋久島の本当の姿を理解してもらうために働くことができること。屋久島の自然をこれほど見れて、ツアー客には喜んでもらえるからエコツアーガイドほどよい仕事はない。 |
| I | 自分自身が自然について知ることができ、それを仕事で後押ししてくれる。ツアー客からの意外なりアクションや話から今まで自分が知らなかったことや気付かなかったことを知ることができる。 |

資料：表2に同じ

や森に立ち入ること自体が問題行為だという考えから来ているようである。自然保護という面では他のガイドと共通しているとしても、この職業に魅力を感じないというのはやはり例外的な考え方である。

③ エコツアーガイドにとって重要な事柄

エコツアーガイドという立場から重要だと考えられていることは各ガイドによって様々である(表5)。エコツアーの中で伝えていくものはガイドによって異なるため意見が分かれるのは当然である。ポイントとしては安全管理、人間性、自然との関わり方という三つがある。程度の差はあってもこの三つのことはどのガイドも前提として考えているようである。ツアー参加者の安全を確保することはガイドの義務であるし、自然を変えない形で関わることも当然である。また、人と人との関わりである以上は人間性も重要になるのは当然である。自然への配慮としてはやはりトイレの問題がある。川の近くでしない、川上でしない、ティッシュは必ず持ち帰るといったことは常識であるが、そのことを伝えることはガイドとして重要な役割である。

エコツアーガイドは「伝えていくこと」を重要な役割だと考えている。ツアーの参加者にいかにうまく伝えていくかはガイドの腕次第で、それぞれこだ

わりを持っているようである。どのようなこだわりがあるかを例にあげると、サービス業にならないこと、大声でしゃべらないことなどがある。これはエコツアーガイドが価格競争をするようなものであってはならないという考えによるものである。

次に、エコツアーガイドが果たす社会的役割についての意識を見てみよう。エコツーリズムの定義にも含まれる地域活動の発展や地域経済の活性化について、エコツアーガイドがどのように考えているのかを分析してみる。

ガイドが社会的に果たす役割については、それを第1の目的として活動してはいなくても、必要なことだと考えられている。この考え方は屋久島出身のガイドには特に強いようで、エコツアーの目的において大部分を占めると考えられている。

エコツアーガイドが島外から来た観光客に最も深く関わっていることから、ツアー客との間で屋久島の一次産業などについて情報の仲立ちをしていることは社会的に大きな役割であるという意見があった。例えば、エコツアーの最中に屋久島の特産品であるタンカンやボンカンの試食をすることによって参加者が土産としてそれらのものを買うとしたら、一次産業の活性化につながることになる。また参加者に

表5 エコツアーガイドにとって重要な事柄
Matters of importance for ecotour guides

| | |
|---|--|
| A | 伝えること。屋久島独特であるところや、実は一般的であるところなど何でも伝えること。不慮の事故などに対応できるように多くの知識を持つこと(例:病気の症状)。チームリーダーとして言うべきことを言える能力。 |
| B | 安全第一であるからどんなときにも臨機応変に対応できること。そのために体力を付けるなど努力をすること。ツアー客のことを見極める能力(例:興味を示す分野)。 |
| C | 縄文杉があって森があるのではなく、屋久島の森があってこそ縄文杉やその他の様々なものがあるのだということ。自然の大切さなどを心に残るように伝えていくこと。 |
| D | 安全管理、レスキュー。エコツーリズムをちゃんと理解して、エコツーリズム的なガイドをすること。レクチャーの知識。 |
| E | 正しく、詳しい知識、教養を持ってガイドすること。ツアー客を選別して自然と対話していくツアーを作り上げること。何回も来てくれる客には2, 3泊かけてゆっくり関わっていくこと。 |
| F | 一言で言えるものではなく、積み重なっていく自然に対すること、人に対することに関する知識、経験。人間性、ある程度リスクが伴うため信頼関係(対自然、対人間)が大切である。安全と満足の両方を与えること。 |
| G | 人を感動させること。 |
| H | 今まで不要だと思われていたものを見出して有益なものに変えて伝えていくこと。新しいものを見つける目を養っていく。そういったものを屋久島の生活文化や歴史にまで広げていくこと。 |
| I | 感性、人間性、ツアー客に伝えるセンス。安全確保は大前提としてあるもの。 |

資料:表2に同じ

飲食店や宿の情報を提供することも可能である。このように情報の仲立ちをすることによって他の産業との連携や他の産業の発展に貢献している。

(3) エコツアーに対する意識

エコツーリズムの定義には多様な解釈があり、一般に認知された定義がないことは前述の通りである。このことは屋久島においても同様で、それぞれのガイドが自分なりの解釈をして、それぞれのエコツアーを実践している。屋久島におけるエコツアーは他の地域におけるエコツアーと同じものを目指しているとは限らない。そこで、エコツアーガイドにとってエコツアーとは何か、どのような魅力があるのか、またどのような改善点があると考えられているかを分析してみる。

表6に示すように、エコツアーに対する解釈はガイドによって様々である。屋久島において最も特徴的なものは自然であるから、自然保護を中心とするエコツアーをするべきであるという考え方がある一方、人が生活していくことを中心とすべきであるという考え方もある。研究者の数だけエコツーリズムの定義があると言われるように、エコツアーガイドの数だけ様々なエコツアーがあると言えるのではないかな。

エコツアーの魅力についてもガイドの数だけ感じ方が違うように思われる。毎日のように自然に関わっている立場からエコツアーの魅力がどのようなものであるかを分析することによってエコツアーの本当の魅力がわかるのではないだろうか。最も多かったのは、自分だけでは気づくことのできないものを体

感できることが最大の魅力だという意見である。

(4) ガイドの組織化、資格・認定制度について

現在、屋久島のエコツアーガイドの間で最も大きな問題となっているのが、ガイドの組織化と資格・認定制度の問題である。地元住民による理解や認知度が低いことも、ガイド間での相互理解や連携が足りないことも、最終的にはこの問題に行き着くことになる。実際にこれらの問題の解決は重要視されており、組織化に向けての取り組みが行われている。組織化については、より強い権限を持った公的な組織を作ることを目的としたガイド部会を立ち上げる動きが起こっているが、資格・認定制度に関しては実際には何も取り組みがなされていないのが現状である。ガイド部会の設立後に資格・認定制度に関する具体的な話し合いが行われる予定である。

そこで、エコツアーガイドがこの問題についてどのような意識を持っているか、また他のガイドに対してどのようなことを望んでいるかを分析してみた。まず組織化についてであるが、どのガイドもガイド同士の話し合いの場を持つことは重要だと考えている。現時点では、実際に相互理解が足りないためにかなりの誤解が生じているようである。ツアー客とガイドの間に信頼関係が必要であるのと同様にガイド同士の間でも信頼関係は必要である。お互いにどのようなことを考えているか、どのような不満があるのかを話し合っていくことは相互理解に欠かせないことである。ほとんどのガイドが現在のガイド連絡協議会より対外的に強い立場を取ることがで

表6 エコツアーとはどのようなものか
What ecotour guides think an ecotour should be

| | |
|---|---|
| 1 | 言葉に束縛されないエコツアーをやっていくことが大切であると思う。 エコツアーを体験した人が自然に対する優しい部分を理解して、自分自身でエコツアーだと実感するものが本来のエコツアーだと思っている。伝えるのはガイドであるけれども決めるのは参加者ではないか。ガイドとしては伝わらないとエコツアーの意味がないのではないかな。 |
| 2 | 突き詰めて考えると自然を好きになること。 定義にこだわらずに自分なりのエコツアーを展開していきたい。本に書かれているエコツーリズムも一つのあり方であるから否定しないし、理解したいと思っている。 |
| 3 | 実際に自然の中で体験していることだけがエコツアーではない。体験が終わっても参加者がエコツアーで感じたことを自分の生活の中で実践していくことによってツアーは続くもの。どこにいてもできるのが本来のエコツアーであると思う。 |
| 4 | エコツアーというものは地域によって違うものであっていいと思う。屋久島の場合は参加者の目的が大抵は自然を体感することであるから、歴史や文化も大切だけど、自然についてレクチャーするのが屋久島におけるエコツアーだと思う。 |
| 5 | 「自然を保護しながらどう生きていくか。」つまり「人と自然の共生」をテーマにして考えていく上で最も有効なものである。ガイドがやっていることはエコツーリズムの中のほんの一部で、本来は自然とともに生きていくこと(生活があるということ)がエコツアーだと思う。 |

資料：表2に同じ

表7 他のエコツアーガイドに望むこと
Ecotour guides expectations of other ecotour guides

| | |
|---|--|
| A | 自分の仕事は何であるかを良く考えて金儲けと思わないでほしい。 それぞれにポリシーがあるのだろうし、不可能なこともあるだろうから一概には言えないが、共通認識を持つ努力をしてほしい。 |
| B | その場限りのウソでごまかすのではなく、わからないことはわからないとはっきり言ってほしい。体力面においても知識の面においても日々向上しようと努力してほしい。(例：ランニング) |
| C | ただのガイド(道案内)なら深く考えなくてよいが、エコツアーと唱うのであればエコツアー、エコツーリズムがどのようなものであるか認識してやってほしい。 |
| D | 救急対策ができないガイドは認めない。自分が技術を持っていないと人の救助はできないのでクライミング、レスキューなどの技術を習得してほしい。 |
| E | 「エコ」の意味、ガイドという職業をもっと知ってほしい。 ただの道案内ではないということを認識しておくべきである。 |
| F | 周囲への配慮を持ってほしい。(例：多くの人が休憩しているところで大声で自分のツアー客だけに解説するのはやめてほしい。自然の中は大声を出すべきところではない。) |
| G | 常識的な部分を持っていてほしい。(例：安全管理の知識、人としての常識) |
| H | 地元住民の理解や認知を深める努力をしてほしい。屋久島に住んでいる以上はもっと地元の人間になりきるべきなのではないか。 毎日休みなくガイドしているガイドはゆとりを持って自分なりのガイドができているとは思えない。 |
| I | 緊急事態などにガイドとしてできることがあるにも拘らずやらないガイドがいる。そのような事態には最大限の努力をしてほしい。 他のグループやガイド付きではない客に対する配慮をもっと持ってほしい。(例：大声でレクチャーしないしてほしい。) |

資料：表2に同じ

きるガイド部会の設立を望んでいる。

次に、エコツアーガイドは他の同業者に対してどのようなことを望んでいるのであろうか。表7に示すように、他のエコツアーガイドに望んでいる内容がガイド同士で重なっている。このことから考えられることは、第1に、ガイド間での相互理解が足りないためお互いに同じようなことを望んでいることであり、第2に、今回の調査対象ガイドはこれら

のことを実行できているが、その他のガイドの中にこのようなことを望まれるガイドがいるということである。今回調査を行ったガイドは非常に意識が高いと感じられたので、屋久島での現状は後者に近いと予想されるが、いずれにしてもガイド間の相互理解を深めることは最重要の課題である。

次に、ガイドの質を改善していくための資格・認定制度について、エコツアーガイドがどのように考

表8 資格・認定制度に対する認識
Opinions on the need for a qualification and authorization system

| | |
|---|---|
| 1 | 絶対必要なものとは思っていない。誰が認定するのか、認定の内容(基準)はどういうものかなど解決が難しい問題がある。自分は淘汰されないようにやるべきことをやっているつもりなので、認定外になるようなことはしていない。認定に振り回されることによって屋久島のガイドがおかしくなってしまうことの方が大きな問題であると思う。 |
| 2 | ある程度の資格・認定制度は必要だと思う。一度資格を取ると安心して向上心がなくなってしまうこともありうる。一定期間ごとの更新が必要だと思う。第三者による判断と自己評価による認定で一方通行ではない制度を作っていく必要があると思う。 |
| 3 | ツアー客との信頼関係を築くに当たって、ガイドとして最低限の能力は必要であるから、資格・認定制度は内容次第では必要だと思う。しかし、認定の判断は非常に難しいので認定制度が悪い方向に働くこともあるのではないかと、ガイドの一面だけを見て認定して、認定されなかったそれ以外のガイドは全て悪いガイドだと判断されてしまうような制度なら必要ないと思う。 |
| 4 | 産業としてきっちりやっていく上でプロとアマの境目をはっきりさせることは絶対必要なので、資格・認定制度はやるべきだと思う。認定基準はかなりハイレベルなところまで追求するべきである。例えば論文、実技、安全管理に関する講習を受けているか、知識を問う筆記試験など多方面から評価し認定すべきである。ガイド同士の評価ではなく学識者や公的団体を含む第三者の立場からの評価が必要である。 |

資料：表2に同じ

えているのかを分析してみたい。ガイドの代表的な意見を示すと表8のとおりである。今回調査した全てのエコツアーガイドは一定の資格・認定制度が必要であると考えている。ただ、絶対に必要だという意見は少なく、これらの制度を実施することによって起こる認定基準や認定者の問題を懸念する意見がかなり多い。

どのガイドも認定の判断基準が難しいこと、さらに誰が認定するのかという点を重要視している。確かにガイドにとっては試験や実技で判断できること以外に、人間性のようにそれで判断しにくい面も重要である。このことはガイド自身がエコツアーガイドにとって大切なものとして人間性やセンス、感性といったものをあげていたことからよく分かる。

しかし、このようなことが前提にあったとしても、ガイドとして最低限の知識は必要である。また屋久島のエコツアーガイドに対する認識を改善するためにも、ガイド以外の一般住民にも分かりやすい制度を作る必要がある。エコツアーを担っているガイドの間でさえも多くの誤解がある。ガイドに直接携わっていない人たちにとってはなおさらである。ガイド同士の間でも地域住民とガイドの間でも、分かりやすい制度の導入が必要である。

ガイドの間には納得のいかない認定によって認定外になってしまうかも知れないという不安がある。納得の行かない認定とは認定基準や認定者の問題である。実際に屋久島でも認定内容の偏りが原因で失敗に終わったことがある。制度として実施されるのであれば公平で正当な認定がなされなければ意味がない。全てのガイドがある程度の資格・認定制度は必要だと考えている以上、この制度は実施されるべきであるが、その際より納得のいく方法によって実施されることが課題となってくる。

資格・認定制度を実施するに当たって一番肝心なことは、その対象者となるガイドが納得できる形で実施されることである。そのための話し合いの場となるガイド部会の設立は、屋久島のエコツーリズムの発展にとってかなり重要な課題であるように思われる。

屋久島におけるエコツーリズムの現状と課題

1. エコツアーガイドの組織化

現在、屋久島ではエコツアーガイドの組織化の動きが進んでいる。その理由として、ガイドの人数の

増加やガイドの質に関するクレームが増加し、新聞や雑誌で取り上げられるようになったことがあげられる。このことをうけて1998年に上屋久町と屋久町およびそれぞれの観光協会（現在は両町の観光協会は合併している）、各ガイド業者からなる「屋久島観光連絡協議会」がガイドの組織化や認定制を始めようとした。しかし、そこで導入されようとした認定制は日本山岳連盟のものがそのまま利用されており、内容が山岳ガイドに偏り過ぎていたこと、不利益をこうむるガイドからの批判があったこと、事前協議がなくガイドの意見が取り入れられていなかったことなどが原因となって失敗に終わった。屋久島には山岳ガイド以外にも自然観察を行うガイドやカヌー、シーカヤックを行うガイドなど様々なガイドがおり、認定制を山岳分野中心で行うことになるとそれ以外の分野のガイドは認定外になってしまうという問題があった。

そうした中でガイド同士の話し合いの場を設けることを目的として「屋久島ガイド連絡協議会」が設立された。その当時は、どのような人がガイドをしているのか、ガイドの問題にはどのようなものがあるのか、何も整理されていない状態であった。またガイド間での統一見解がないことや相互理解がなかったために、ツアー客が求めるものと実際にガイドが提供するものとのミスマッチが生じクレームが増加していた。そこでガイド間でお互いを認識したり、実際にクレームへの対応の仕方を話し合ったりするために同協議会が設立された。協議会は会員制を採っており、ガイド個人の意見をより多く反映できるように、会社単位ではなく個人単位で会員になっている。月1回の例会が行われており、そこでは各ガイドによる報告会や毎回テーマを設けてガイド間での話し合いが行われている。また日本赤十字社による救急法やテーピング法の講習などガイドに必要な知識を学ぶレベルアップのための学習会もある。

1999年になると対外的な発言力や影響力を持った組織作りを目的として屋久島観光協会によるガイド部会設立の動きが始まった。ガイド連絡協議会はガイドによる任意団体であるため対外的に弱い立場にあった。そこで公的な団体を作ることにより、例えば環境省や林野庁との交渉において発言力や影響力を高める必要があった。その後2002年には屋久島観光協会理事会においてガイド部会設立が承認され、現在も設立に向けた話し合いが進行中である。

2. 屋久島におけるエコツアーの位置付け

エコツアーを実践していく上で重要なこととして地元住民との関わり合いがある。エコツーリズムが地域の自然環境や文化の保全、地域経済の振興を目的としていることから、地域住民の理解を得ることは、エコツアーを発展させていく上で不可欠である。そこで、屋久島において地元住民がエコツアーをどのように認識しているか、地域住民にとってエコツアーの発展はどのような利益があるのか、住民自ら進んで参画したいと考えているのか、といった点を分析してみたい。

調査対象者は、①観光協会の職員(女性)、②レンタカー店長(男性)、③観光センター売店の店員(女性)、④港売店店員(女性)、⑤港売店店員(女性)、⑥鹿児島大学フィールドセンターの管理者(女性)である。今回これらの対象者を選んだのは、エコツアーガイド以外の住民、観光客の意見を聞くことができる立場にある住民、エコツアーの経済的影響を受けていると予想される住民の意識を調査するためである。

(1) エコツアーに対する意識

まず、これらの対象者がエコツアーに対して興味があるかどうか、またどこに興味があるのか、エコツアーに参加したことがあるかどうか調べ、エコツアーに対する認識度を検討してみたい。

港売店の店員⑤とフィールドセンターの管理者⑥はエコツアーを全く知らないということであった。港の売店は観光客との関わりが多い場所である。にもかかわらず知らないということは屋久島の住民の認識度は一般にかなり低いと考えられる。観光センター土産売場店員③からはエコツアーの健康的なところに興味があるという回答が得られた。このことからエコツアーの概念(定義)はあまり知られていないように思われる。地域住民はエコツアーを単なる登山やガイド付きツアーと同じ感覚で認識しており、自然を体験できるものなら何でもエコツアーと考えているようである。またエコツアーに実際に参加した経験があるという回答者は1人のみで、このことからエコツアーがよく理解されていないことが予想できる。調査対象者のほとんどが縄文杉登山の経験があり、白谷雲水郷にも行ったことがあるので、あえてエコツアーに参加しなくてもよいという意見だった。

(2) エコツアーが盛んなことに対する意識

屋久島でエコツアーが盛んになったことについて、

地域住民はどのように受け止めているのであろうか。まず、プラス面としては、エコツアーに参加した観光客のリピーターが増加しているという意見や、通り一遍の観光でない観光が確立されるという意見があり、全般的に観光客の増加はよいことであると考えているようである。

一方、マイナス面の意見はかなり具体的である。エコツアーについての探求がなされないまま業者だけが增加していること、何の取り決めもなしに無制限にガイドが行われそれが原因でトラブルが多発していること、軽い装備で登山するツアー客の増加で事故が多発していること、質の悪いエコツアーガイドがいること、高すぎるガイド料金が屋久島のイメージを悪くしていること、などの意見があった。住民はエコツアーに対してあまりよいイメージを持っていないことがわかる。「事故が多発している」とあるが、これについてもエコツアーに対する誤解がある。エコツアーに参加すれば装備については事前に打ち合わせが行われる。その上、ガイドが安全に配慮しているので個人で体験するよりも事故が起こる可能性が低くなるのである。ところがエコツアーの正しい意味をあまり知らないため、登山客全般をエコツアーの参加者と見なして回答しているようである。

(3) エコツアーの影響に対する意識

次にエコツアーが及ぼす様々な影響について地域住民はどのように考えているか、地域活性化への影響(役立っているか)、地域経済への影響、自然環境への影響の三面から分析する。

まず、地域の活性化については役立っているという意見が多い。しかしエコツアー会社が儲かっているだけだという意見や、地域全体の活性化とまではいかないという意見もあった。次に、経済面では交通機関への影響として白タク行為に対する非難があげられる。エコツアーの影響で仕事が減っている業界があることはエコツアーの概念に反しているのではないか。反対にフェリーや高速船トッピーの利用増加など他産業への波及効果があるという意見もあった。

自然環境に対する影響には肯定的な意見が多い。観光客の増加は環境によくないという考え方は、自然に深く関わって理解し、さらに地域を活性化させることが目的であるエコツーリズムの概念になじまない。むしろエコツアーの方が自然に与える悪影響は少ないともいえる。

(4) ツアー客、エコツアーガイドへの希望

ツアー客に対する地域住民の意見としては、例えばゴミ問題がある。山や森への配慮に比べてその他の場所への配慮が足りないという意見である。エコツアーは山だけで実践されるものではないからである。その他、エコツアーが物見遊山ではないことを知ってほしい、無謀な計画を立てないでほしいという意見もあった。

エコツアーガイドに対しては、ガイドの質の問題がかなり大きいようだ。質の悪いガイドが屋久島のイメージを損なっているという考えから、ガイド全体の質の向上を望んでいるようである。また、ガイドはキャンセル料を取らないでほしいという意見、島外から来た知識の乏しい人間や島の出身者でも明らかに知識の少ない人間が、突然ガイド業を始めることが気に入らないという意見もあった。

(5) 観光客に対する意識

地域住民は観光客の増加が屋久島に悪影響を及ぼしていると感じているようである。経済的には良いという意見がある一方で、個人的なレベルでみると、ゴミ問題のように身の回りの環境悪化を危惧している意見が多い。

エコツアーに対しては否定的な意見が多いにも拘らず、ツアー参加を勧めるという意見もある。ガイド付きの観光客の方が単独で行く客よりも自然を壊さないという考えからである。

(6) エコツアーの改善点に対する意識

ここで、屋久島のエコツアーにはどのような改善点が考えられているか例をあげてみたい。まず、エコツアー業者間でエコツアーの意義や概念について統一した見解を示してほしいという意見がある。さらに他業種との連携が不十分であるという意見、質の悪いガイドがいるため資格制度や免許制度などを導入するか罰則を与えるべきであるという意見、どのような客でも参加できるエコツアーではなく、自然を好きな人、環境破壊をしない人など選ばれた客だけが参加できるエコツアーにしてほしいという意見があった。

全体を通して言えることは、エコツアーに直接関わりのない人たちはあまりよいイメージを持っていないということである。また、回答者が観光協会の職員、港の売店店員など観光客との関わりが多い人たちであることを考慮すると、エコツアー自体を知らないという回答が二つもあるのは、住民のエコツアーに対する認識がいかに低いかを示している。さ

らに、観光業に従事しエコツアーの経済的恩恵を受けているはずの人たちが、エコツアーに対して否定的である。地域の活性化を期待するのであれば、まず地域の住民に認められることは必要不可欠である。地域住民はエコツアーという言葉は知っていてもエコツーリズムの概念についてはあまり知らないようである。屋久島でエコツーリズムを発展させていく以上は、まず地域の人たちにエコツーリズムの概念を少しでも理解してもらい、内容がしっかりしたツアーであればガイド料金は必ずしも高くはないこと、エコツアーは登山だけではないこと、などを理解してもらう必要がある。地域住民やエコツアーガイドが一体となって自然や地域経済について考えてこそエコツーリズムの意義があると思う。

今回の調査で最も印象的だったことはガイドの質の問題である。そもそも地域の住民にエコツアーを認めてもらうとしても、ツアーの内容が充実したものでなければ認められるはずもない。ガイドの質にこだわるのは当然のことであり、質の向上のために対策をねっていくことは重要なことである。屋久島にはガイドの資格制度や登録制度がないために、どのような人でもその場限りでガイドをすることが可能となっている。もともと屋久島に住んでいる人たちは、屋久島に関する知識が乏しいガイドがツアー客相手に屋久島の解説をしていることを不快に思っている。ガイドという立場を確かなものにするためにも、ガイドに関するガイドラインのようなものが必要である。

エコツアーと直接関わりのない人たちがエコツアーをどう見ているのかについては、その認識度がかなり低いように思われる。エコツアーに対して肯定的であれ否定的であれ、それをよく理解した上での回答は少なかった。エコツアーに対する認識は、登山、自然体験という程度ではないだろうか。単なる登山や自然を体験するだけなら個人でできる。エコツアーは自分だけでは得ることができないものをガイドを通して得ることができ、かつ地域の文化がより深く理解され、地域経済も潤うことに意味がある。そのことを旅行者に理解してもらう必要がある。その上で納得のいくエコツアーに改善していくべきである。

む す び

エコツーリズムはその言葉も概念も誕生してまだ高々30年の分野である。日本でも1980年代末以降に浸透してきたものであるため、いまだ広く知られて

いない。エコツーリズムの定義は広く認知されていないのが現状で、その解釈は様々である。通常は「観光産業の発展」、「自然・文化・歴史の保護」、「地域経済の活性化」の三つが融合されて成り立つものだと考えられている。これらがバランス良く保たれた状態がエコツーリズムの理想だとされているが、実際は地域によってそれらの重要性の認識は異なってくるものである。

屋久島は1993年に世界自然遺産に登録され、観光客が増加し、登山客の客層が変わってきた。そのことによってガイドを必要とする登山者が増加し、消費者からのニーズも高まりエコツアーが拡大してきた。今ではかなり重要な産業に発展している。屋久島の場合、エコツアー参加者の目的は大部分が自然との関わり合いである。屋久島におけるエコツーリズムは「自然保護」が比較的重要な位置を占めている。これは一見バランスが崩れているようであるが、しかし間違った方向であるとは言えない。エコツーリズムはその地域にあったやり方で実践されてこそ意味を持つからである。屋久島では「地域経済の活性化」に重点を置いたエコツーリズムも実施されている。エコツアーガイドは自分が伝えたいと思う事柄について独自のやり方でエコツアーを実施しているのである。このことは地域の活性化にとって好ましいことであるように思われる。多方面からのエコツアーがあった方が多方面にわたる効果が期待できるからである。

エコツーリズムを実践するひとつの形としてあるのがエコツアーである。エコツアーはエコツアーガイドが参加者にインタープリテーションをしながら自然や地域の文化に関わるひとつの形態である。それ故、エコツアーガイドが果たす役割が重要になってくるのである。

エコツーリズムの歴史が浅いことが影響しているのか、世界でも日本でもエコツアーに対する地域住民の認識度が低いことによって生じるエコツアーガイドへの批判が問題となっている。エコツーリズムにおいて地域における活動や交流は無視できないものである。そこでこれらの問題の解決が重要となってくる。その対処法として資格制度や認定制度があり、日本でも北海道や小笠原諸島のエコツアーではそれが実施されている。

屋久島でもこの資格・認定制度を導入してほしいという要望がエコツアーガイドの間で高まっている。現在、制度の導入やガイド間の相互理解を深めるこ

とを目的として、ガイド同士の話し合いの場を設けるための組織作りが進んでいる。ガイド連絡協議会という任意組織はすでに設立されているが、対外的により強い発言力や影響力を持った公的組織を目指して「屋久島観光協会ガイド部会」の設立の動きがある。同部会は近いうちに設立される予定である。

エコツアーを担っているエコツアーガイドの意識を分析することは、今後の屋久島におけるエコツーリズムがどう展開していくかを考えていく上で重要なことである。屋久島のエコツアーガイドは多くの場合、ガイドを始める当初の動機として自然に関わる仕事がしたいという理由でエコツアーガイドという職業を選択している。しかしガイドの興味は次第にエコツアー参加者との関わり合いの部分にも広がっていくようである。多くの人と親密になれることは、エコツアーガイドにとってかなり魅力を感じるのだという。理想的なエコツーリズムを目指すには、自然との関係も人との信頼関係もどちらも重要である。だからこそエコツアーガイドの人間性が重視されるのである。

エコツアーガイドはこの仕事に対して職業として認識を持ちながらも、最低限の生活ができれば一生続けていくという趣味的な考えを持っている場合が多い。他の職業では置き換えることのできない思い入れをもってやっているようである。

今回調査の対象となったエコツアーガイドは屋久島の自然保護に関する意識が非常に高く、さらに地域活性化へ貢献していくことも目標としているようである。しかし、このように非常に意識が高いにもかかわらず、ガイド間での相互理解が足りないことが原因となって様々な誤解が生じているのも事実である。屋久島でもその他の地域と同じように、地域住民やエコツアー参加者によるエコツアーガイドの非難やイメージ低下が問題となっている。これらの問題を解決するためにも、どのような人がどのような理由でエコツアーガイドをやっていて、さらにどのようなことを目指しているのかを各ガイドがお互いに認識し合うことが重要であると思われる。またエコツアーガイドの間でも要望されているように、より充実した資格制度や認定制度を導入していくべきである。

エコツーリズムは現状のように、はっきりした定義がない状態の方がむしろ理想的であるかもしれない。定義や言葉にこだわっていると、理想ばかりが先行して本来目指すべき自然保護や地域活性化がう

まくいかないこともある。今回エコツアーガイドと地域住民の双方から意識調査を行ったことはかなり意味があるように思われる。屋久島ではガイド間の相互理解のみならず、住民とガイド間の理解が不十分である。実際ガイドは批判が起こっていることを認識していても、住民の話を直接聞くことはないの、その詳しい内容までは把握していなかった。様々な誤解をなくしていくことが現在発展途上にあるエコツーリズムの重要な課題である。

エコツアーの良し悪しはエコツアーガイドの力量に大きく左右される。だからこそエコツアーガイドがそれぞれ自分なりのエコツアー観を確立し、その目的に向かって実践していくことがエコツアーの最も理想的な形である。これを実現していくためにも

関係者の相互理解を深めていくことが重要である。

参 考 文 献

- [1] 新井俊一・石森秀三ほか：エコツーリズムの世紀へ。エコツーリズム推進協議会。東京（1999）
- [2] ニッポン離島探検隊：好きになっちゃった屋久島，奄美の島々。双葉社。東京（2002）
- [3] 枚田邦宏：新たな経済的森林利用とその担い手。林業経済研究，47(1)，35-40（2001）
- [4] 吉田春生：屋久島観光の現在－エコツーリズムとマス・ツーリズムの併存について－。地域総合研究（鹿児島国際大学）。29(2)，77-93（2002）
- [5] 世界自然遺産会議：豊かな自然と共生する地域づくり事例集。鹿児島県環境生活部環境保護課（2001）

The Present Circumstances and Challenges of Ecotour Guides in Yakushima

Fumiko MATSUMOTO, Shoichi TASHIRO and Atsumu OHNISHI

(Laboratory of Agricultural Economics)

Summary

In recent decades, environmental problems have been growing on a global level. Recognition of this issue led to the adoption of “sustainable development” as a guiding principle by the United Nations Conference on the Human Environment in 1972. Ecotourism spread as a result of this. The definition of ecotourism varies. Generally, it involves a combination of “development of the tourist industry”, “protection of nature, culture, and history”, and “activation of an area”. Yakushima is an island which was registered as a World Natural Heritage site ten years ago, and is known as a mecca of ecotourism. It is difficult to be precise about the number of ecotour guides currently working on Yakushima, but it is estimated that there are about eighty of them. In an ecotour, the ecotour guide is indispensable. We analyze the thinking of ecotour guides and consider the problems which they face.

Key words : Yakushima, ecotour guide, qualification and authorization system, protection of nature, local activation

The Bulletin of the Faculty of Agriculture 54, 15~29 (2004)